「やりたいことをやる」年代から、「やるべきことをやる」年代へ　(1)
～　育成年代の一貫指導　～

「指導者の誤った指導で、未来ある若者の芽を摘み取ってはならない。ユースコーチの仕事は、選手一人ひとりの持っている才能を最高レベルに導くことだ。」

～　Ｈ・オフト（元日本代表監督）

選手育成の現場にいて悩むのは、指導している選手が、自分の指導で将来、本当によい選手になれるかということです。特に中学から高校に上がる時期は、その一つの分岐点になります。それまでのスーパースターが平凡な選手になることはよくあることです。

一つめの理由は、選手間の体力差が小さくなることです。早熟な選手は、小中学生の時に体力差だけで勝ててしまいます。しかし、高校へ行ってからは、技術がない選手は通用しなくなります。指導者は、早熟の選手にもきちんとした技術を身につけさせなければならないのです。

２つめの理由は、サッカーで求められる質が変わるからです。高校年代はいわゆる「インディペンデント・エイジ（自立期）」にあたり、大人のサッカーの入口になります。そのときには、自己を犠牲にしてチームプレーができないと自分の能力を発揮できなくなります。小学生の時には技術の高い選手に限って、戦術が身につかずに、何でも一人でやってしまう癖がついてしまいがちです。ドリブルばかりでパスができない（判断の悪い）選手や攻撃ばかりで守備ができない（ハードワークできない）選手はチームの戦術を実践できずに使えない選手になってしまいます。指導者は、上手な選手ほど甘やかさずに高い要求をしなければなりません。

よい選手になるためには、この他にも高校年代までに「サッカーの基本」を身につけなければなりません。ところが、中学生くらいになると第２次性徴（思春期）を迎え、人間として２度目の変身をします。肉体的には「ゴールデンエイジ」（もっとも技術の習得に適した時期）を過ぎてクラムジーの時期（身長が急激に伸び始めるとともに、多少動きがぎこちなくなります。）を迎えます。難しいのは、精神的に不安定になりやすい時期なので、もしかすると指導者のいうことを聞かなくなるということです。（技術はもちろん、戦術を身につけるには難しい時期になるかもしれません。）また、この時期は脳の機能も大幅に低下し、言われたことを黙って聞いているだけでは何も覚えられなくなります。自ら進んで取り組んだ選手だけが伸びるのです。小学校の時は、素直でいい選手（本当は、ただ、何も考えずに指導者の言うことを黙って聞いていただけかもしれない選手）が、伸び悩むのも当然のことです。（当たり前ですが、小学校の時に落ち着いて話を聞けない選手は、その時点ですでに伸びなくなっています。）

このように、子どもたちは成長する過程で多くのものを身につけてよい選手になっていきます。それは目に見える技術だけでなく、目に見えにくい部分、戦術的な理解･･積極的な姿勢や自己管理できる能力まで幅広くあります。目に見えにくい部分に気づくのは難しいことかもしれませんが、よい選手になるために、子どもたちが早く気づいてくれるとよいと思います。と同時に、その子どもたちに気づかせるのは、周りにいる我々大人の役割かもしれません。

「やりたいことをやる」年代から、「やるべきことをやる」年代へ　（２）
～　育成年代の一貫指導　～

「自分にとって何がプラスで何がマイナスかを常に考え、プラスになることは、たとえつらくともやり抜くこと。」

～　Ｈ・オフト（元日本代表監督）

（前号の続きです。）選手にとって中学から高校に上がる時期は、その一つの分岐点になります。それまでのスーパースターが平凡な選手になることがあります。それは、サッカーで身につけておかなければならないこと（「サッカーの基本」）が欠けている選手が、高校へ行って通用しなくなるからです。

そして、この時期に選手は、受験という壁を乗り越えなければなりません。当然ですが、選手はサッカーと勉強を両立させる必要があります。将来、プロになるのは一握りの選手、その選手も引退後の生活があります。トップのプロでさえ、勉強と両立させているのです。まして、釧路の子どもたちが、好きなサッカーだけやっていればよいわけはありません。指導者は選手の学習や生活にもきちんと目を配る必要があります。（選手としての能力を伸ばすためには、人の話に耳を傾けたり、周囲の状況に気づける必要があります。難しいことですが、サッカー選手を育てるということは人間を育てるということなのだと思います。）

以前に仕事でＵ－１７北海道トレセンだった山瀬（功）選手の合宿や遠征に一緒したことがあります。当時から、サッカーに取り組む姿勢が素晴らしく、オフザピッチでもキャプテンとしてしっかりしている印象でした。ただ、当時の山瀬選手は、top（北海道ではよい選手でプロの可能性を持った選手）でしたが、toptop（この年代の代表レベルの選手、将来の日本代表）ではありませんでした。今の彼をつくったのが何であるかはわかりませんが、ヒントにはなります。

釧路には、多くの可能性を持った選手がいます。しかし、多くの選手には欠けているものが多いのもまた事実です。彼らがピッチの中でも外でも「やりたいことをやる」のではなく、「やらなくてはいけないことをやる」のだということに早く気づいてくれたらと思うのと同時に、指導者の仕事もそこにあるのだと気づかされます。

＊追記‥今年の北海道の高校サッカー界で活躍した釧路出身の選手には、全国高校サッカー選手権大会に出場した助川君（室蘭大谷←鳥取中）、黒滝君（室蘭大谷←鳥西中）の他にも大山君（登別大谷←景雲中）、松田君（登別大谷←遠矢中）、坂見君（帯広北←青陵中）等多くの選手がいました。トレセンに入っていた選手が多いのも事実ですが、中学校時代に優勝経験がなかったり、中心選手でなかった選手もいます。彼らのこれまでの頑張りに敬意を表したいと思います。そして、今、釧路で頑張っている多くの選手も自分の可能性に気づいてくれるとよいと思います。